甲第65号証

東京高等裁判所　第8民事部DE係御中

意　見　書

住所　北海道旭川市大町2条14丁目

氏名　松崎道幸

（医学博士・道北勤医協旭川北医院院長）

2020年2月18日

（1）受動喫煙症の診断においては、受動喫煙者の申告、すなわち詳細な問診が受動喫煙の客観指標測定に匹敵する意義を持つ

一般的に、ある健康有害因子が、健康を損ねているか否かを証明するためには、有害物質の摂取量（ばく露量）に見合う健康障害が生じているかどうかを明らかにする必要がある。

同様に、非喫煙者の体調不良が受動喫煙によるものかどうかを知るには、非喫煙者の体（尿・血液など）に喫煙由来の有害物質がどれほど入り込んでいるかを定量的に測定し、臨床症状と比較する必要がある。

受動喫煙の主な客観指標は、血液中ニコチン濃度、尿中あるいは毛髪中ニコチンあるいはコチニン濃度、室内気のニコチン濃度、$PM_{2.5}$などである。

しかし、これらの指標測定には、専門的技術と多くの費用を要するため、受動喫煙者からの自己申告データで代用が可能かどうかについて検討されてきた。受動喫煙者からの自己申告データには、同居する喫煙者の人数、1日に消費される紙巻タバコ本数、1日当たりばく露時間、暴露年数、受動喫煙の程度についての主観的評価、家庭以外の場、たとえば、近隣からのタバコ煙流入度合い、職場、公共施設、輸送機関、飲食サービス施設の喫煙規制状況と滞留時間、頻度などがこれにあたる。

これらの主観的受動喫煙ばく露状況の申告内容が、受動喫煙の客観的指標、生体マーカーとどのように関連するかに関する調査研究が数多く行われた結果、受動喫煙に関する非喫煙者の主観的申告と客観的指標との間に極めて良好な相関が存在することが明らかとなったのである。つまり「受動喫煙者の主観的申告に基づき推定された受動喫煙ばく露程度」が「受動喫煙の客観的指標」の満足できる代用指標として、「現実に発生している受動喫煙関連健康障害（受動喫煙症）」の原因であることを強く示唆するクリティカルな情報であることが判明しているのである。

以下に受動喫煙者の申告が客観的受動喫煙ばく露指標と極めて良好に関連することを証明した主な論文を紹介する。

【題名】成人喘息患者における環境タバコ煙への曝露状態の測定
【著者】アイスナー博士（カリフォルニア大学サンフランシスコ校）他
【掲載誌】環境保健展望誌　2001年
【要旨】50 名の喘息患者に受動的バッジモニターを装着してニコチン曝露量を 7 日間測定した．自己申告受動喫煙ばく露度とニコチン濃度測定値は良好な相関を示した（p＝0.0006）．曝露なし群と比べた呼吸器症状オッズ比は，低曝露群（0～0.05 μg/m3）で 1.9（0.4～8.8），高曝露群（＞0.05）で 6.8（1.4～32.3）となり，呼吸器症状と受動喫煙の客観指標はよく相関した．
【出典】Eisner MD,et al. Measurement of environmental tobacco smoke exposure among adults with asthma. Environ Health Perspect. 2001 Aug;109(8):809-14.

【題名】小児における室内気のニコチン濃度と保護者の喫煙状況の申告内容の比較
【著者】ゲーリング博士（オランダ・ユトレヒト大学）他
【掲載誌】職場環境医学誌　2006 年
【要旨】ドイツ、オランダ、スウェーデンの小児 1346 名の保護者に受動喫煙の程度を評価する質問票（家庭での喫煙者数、喫煙本数、受動喫煙時間など）調査を行い、室内気中ニコチン濃度、小児の尿中コチニン濃度との関連を検討したところ、質問票で評価した受動喫煙の度合いと受動喫煙の客観的指標である室内気中ニコチン濃度、小児の尿中コチニン濃度が良好な関連を示したことが明らかになった。
【出典】Gehring U,et al. Comparison of parental reports of smoking and residential air nicotine concentrations in children. Occup Environ Med. 2006 Nov;63(11):766-72.

【題名】多数の生涯非喫煙者コホートにおける受動喫煙状態の評価手法「スモークスケール」
【著者】ミサイリディ博士（ギリシア、テッサリー大学）他
【掲載誌】プロス・ワン誌　2014 年
【要旨】非喫煙の小児 191 名と成人 95 名において、質問票（受動喫煙の場所、機会、度合い、持続時間など 9 項目）への回答結果に基づく受動喫煙ばく露度が受動喫煙ばく露の客観的指標である毛髪ニコチン量と極めて良好な相関を示していることを報告した。著者らは、小児と成人の受動喫煙ばく露度に関する問診票「スモークスケール」による計測が、正確性、信頼性、簡便性、経済性に優れていると結論した。
【出典】Misailidi M,et al. Instruments to assess secondhand smoke exposure in large cohorts of never smokers: the smoke scales.　PLoS One. 2014 Jan 21;9(1):e85809.

【題名】受動喫煙強度に関する自己申告データと客観的受動喫煙マーカーとの比較
【著者】Martínez-Sánchez 博士（カタロニア大学）他
【掲載誌】衛生官報 Gaceta Sanitaria　2018 年
【要旨】49 名のボランティアの住宅に受動喫煙の客観的指標である空気中ニコチン濃度、ベンゼン濃度の測定器を設置し、受動喫煙の生体マーカである唾液および尿中コチニンを測定した。受動喫煙の程度に関する問診（室内の受動喫煙程度の 10 段階評価、喫煙者数、喫煙本数など）結果に基づく受動喫煙の強度と受動喫煙の客観的指標は良好な相関を示した。簡単な質問票によって、家庭の受動喫煙ばく露量を正確に評価できることが明らかとなった。
【出典】Martínez-Sánchez JM,et al. Validity of self-reported intensity of exposure to second-hand smoke at home against environmental and personal markers. Gac Sanit. 2018 Jul - Aug;32(4):393-395.

受動喫煙者の健康障害と受動喫煙の関連を明らかにするうえで重要なことは、受動喫煙者に対して、受動喫煙の機会、持続時間、受動喫煙強度の適切な評価等を綿密に問いただすことである。これにより、受動喫煙の程度が適切に評価され、臨床症状との関連を明らかにすることができる。また、受動喫煙のない時期において、諸症状が軽減消失するかどうか、さらに、再び受動喫煙ばく露を受けた際に症状が再発重症化するかどうかについても、詳細に病歴を収集することが重要である。

以上、受動喫煙状態に関する詳細な問診が受動喫煙症の診断にとって必要かつ十分条件であることを論証した。

（2）「受動喫煙症診断基準」は、現場の臨床医の科学的知見に裏付けられて作成されたものである

全世界で、これまでに受動喫煙の健康影響について、1万6千点以上の科学論文が発表されている。これらの論文は、健康を損ねた人々を直接診療する第一線の臨床医の詳細な診療記録を一次情報として作成されたものである。受動喫煙症診断基準は、眼前の病苦にさいなまれた方々の真摯な訴えに対するわが国の臨床による医学的、科学的回答として策定されたのである。わが国で起こされた多くの受動喫煙訴訟において、受動喫煙が化学物質過敏症をはじめ様々な疾病の原因となることが認定されているという事実が、本診断基準の妥当性を証明している。受動喫煙症診断基準が科学的根拠に基づかないかのような主張は、極めて不当であり、受動喫煙の病苦を受けておられる方々、そして、そのような病状に真摯に向き合っている多くの臨床医に対するいわれなき中傷と断ぜざるを得ない。

【経歴】

松崎道幸（まつざき　みちゆき）　1950年6月26日生

現住所　北海道旭川市宮下通20丁目1106　エスペランサ宮下1003号

勤務先　北海道旭川市大町2条14丁目　道北勤医協旭川北医院

学歴・資格・職歴

- 医籍登録　1975年5月30日（第225276号）
- 学位　　医学博士
- 1975年　北海道大学医学部卒業。
- 1975年　北海道大学医学部第1内科学教室（国立札幌病院血液内科、市立旭川病院循環器内科、江別市立総合病院内科、札幌市南保健所における勤務あり）
- 1984年　深川市立総合病院内科部長
- 2014年7月より現職　道北勤医協旭川北医院院長

専門分野・業績

- 呼吸器内科・禁煙教育・禁煙指導・喫煙関連疾患の疫学
- 主な役職：日本禁煙学会理事
- 厚生労働省「喫煙と健康問題に関する検討会」委員として「新版喫煙と健康」における受動喫煙の慢性影響に関する報告書の作成にあたった（2002年）。
- 主な論文

  「日本の医師は禁煙の手本を示しているか」（医学のあゆみ、1993年）

  「受動喫煙による健康影響」（臨床科学、1998年）

  「未成年者のたばこ対策」（生活教育、1999年）

  「呼吸器疾患と受動喫煙」（小児科臨床、2002年）

  「喫煙は日本人の最大の死亡原因　―喫煙対策はメタボリック症候群対策に優先する」（医事新報　2006年）など
- 主な講演

  産業衛生学会総会「喫煙とメタボリックシンドローム　同時対策のコツ、極意」（2007年）

  ガン予防道民大会基調講演（2007年）

  北海道特定健診指導者講習会喫煙対策について（2008年）

  総合健診医学会総会シンポジウム「健診の場における禁煙指導」（2008年）

  日本動脈硬化学会総会フォーラム「メタボリック症候群と喫煙」（2008年）

  国立保健医療科学院講演「受動喫煙の健康影響総論」（2008年）

  トヨタ自動車本社講演「職場の喫煙対策」（2008年）

  人間ドック学会総会教育講演「人間ドックとタバコ」（2010年8月）など